品川郷土の会 会報

令和 3 年(2021)5 月
復刊第 114 号
発 行 人 坂 本 道 夫
編 集 人 野 口 健 夫

第 463 回例会中止

新型コロナの嵐は収まる様子もなく、5 月 7 日、第 3 回緊急事態宣言延長が発出され、5 月 22 日に予定した第 463 回例会が中止となりました。今回は、例会で紹介する予定だった『朔太郎が愛した大井町』の予稿を紹介し講演に替えます。

講演予稿　「朔太郎が愛した大井町」

副会長 野口 健夫

萩原朔太郎が大正 14 年(1925)、東京に移住し、始めて住んだ場所は、荏原郡大井町 6170 番地(現品川区西大井 5 丁目)である。

函装、総革装、三方金（天に草紋入）草花模様箔押表 1500 部限定出版の古書店では 5 万円以上する豪華本、第一書房版『萩原朔太郎詩集』に「大井町」という詩が掲載されていて、その後の児童図書などにも引用されている。また、同時期に同名の少し長い散文詩集が『詩と随筆集』第一輯　昭和 3 年(1928)5 月発行に所収され、前詩より具体的に大井町の情景が表現されている。

筆者は以前から、僅か 2 ヶ月しか居住しなかった理由は？転居した理由は？が気になっていました。この度、『都新聞』昭和 2 年(1927)6 月 14 日 - 17 日連載記事が掲載されていることを知りました。これに拠れば、朔太郎は大井町を嫌うどころか大好きだったことが分かるので紹介したい。原文を読んだ方が朔太郎の大井町愛の心情が良く分るので関係部分を、そのまま引用したい。

なお、盟友室生犀星に勧められ移転した馬込生活で、妻稲子は馬込文士村の川端康成妻や宇野千代などと交流し、地方育ちの稲子は当時流行していたモガやダンスに嵌り、葉子・明子の子育てを放棄し青年と駆け落ち、夫婦間は不仲となる。結局、昭和 4 年離婚、朔太郎は子女を連れ帰郷した。

移 住 日 記

大井―田端―鎌倉―馬込

1

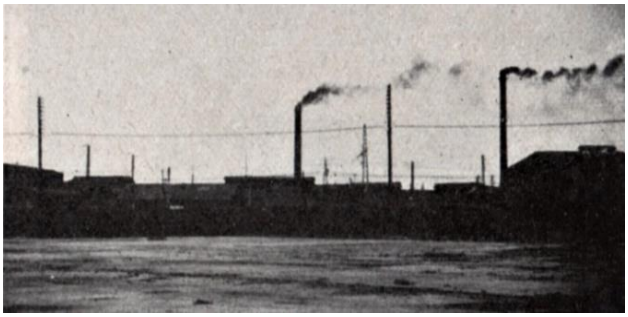
田舎の郷里を出てから、この二三年の間に、私はずいぶん諸方を移転し歩いた。始めは**大井町**に住み、それから田端に移り、さらに一年ほど居て、最近また東京の郊外に帰ってきた。

田舎から始めて出て、あの工場町の**大井**に住んだ時は、一ばん印象が深かった。省線電車の停車場を出て、煉石(煉瓦)の工場区域に吸い込まれて行く、あの**大井町**の気分ほど、不思議にノスタルジヤのものはない。**三股(三ツ又)**の繁華な通りには、工女や職工がむらがって、空には煤煙がただよっている。

さびしいではないですか
お嬢さん！

現在も光学通り（稲毛通り）に残る郵便局（〇）と煉瓦塀（⇒）　（令和３年　野口撮影）

品川道踏切側から見た三ツ又通商店街（大正 12 年　大井町誌）

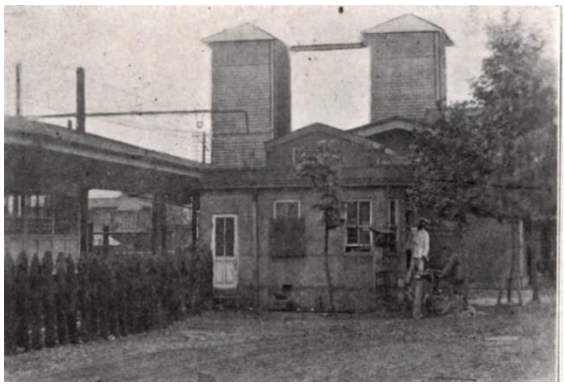


後藤毛織工場（大正 15 年　大井町名鑑）

私の「青猫」という詩集で、悲しげに幻想していたことは、丁度そっくり**大井町**の景色に現れていた。そこの裏街には、空地のさびしい草むらがあり、古く壊れかかった印刷工場などが、青ペンキのはげた窓を並べていた。路を行く時も、頭の上では常に機械が回転し、汽罐や、蒸気や、革帯（ベルト）やの、轟々という音が鳴っていた。職工や工女の群は、いつも郵便局の窓口にあつまって、貧しい貯金を取ろうとしていた。空には無数の煙突や水槽（タンク）があり、冬の日ざしの中で黒ずんでいた。

大井町！　いかにしても私はその記憶を忘れない。丁度私が此所に来た時、私は自分の前から幻想した、詩の中の景色を現実に見る気がした。私の詩集「青猫」で歌おうとしたノスタルジヤが、丁度そこの工場で、幻燈のように映されて居るではないか。私はすっかり**大井町**が好きになった。恐らく永久に此所に住もうとさえ決心した。

いろいろな事情が、しかしながら私の転居を余儀なくした。何よりも、室生犀星君の強い誘惑が、私を田端に移転させた。私は**大井町**と別れることを、愛人と別れるように悲しんだ。けれども室生君の近所に住み、このなつかしい古い友と往復し、日常会話したり散歩したりする幸福を考えると、遂に好きなこの町を去ろうとする、最後の決心に到達した。



大井町駅（昭和７年　大井町史）

…　2～4（続）　略　…

『都新聞』昭和２年（1927）6 月 14 日～17 日連載　所収

散文詩は以前、例会で紹介しており、長文でもあるので、今回は前記詩集に載せ、よく引用される短編詩の方を紹介する。

大　井　町

俺は泥靴を曳きずりながら
ネギや　ハキダメのごたごたする
運命の露地をよろけあるいた。
ああ　奥さん！　長屋の上品な嬶(かかあ)ども
そこのきたない煉瓦の窓から
乞食のうす黒いしゃっぽの上に
鼠の尻尾でも投げつけてやれ。
それから構内の石炭がらを運んできて
部屋中いっぱい　やけに煤煙でくすぶらせろ。
そろそろ夕景が薄(せま)ってきて
あっちこっちの屋根の上に
亭主のしゃべるが光り出した。
へんに紙屑がぺらぺらして
かなしい日光のさしてるところへ
餓鬼共のヒネびた声がするではないか。
おれは空腹になりきっちゃって
そいつがバカに悲しくきこえ
大井町織物工場の暗い軒
わあっと言って飛び出しちゃった。

第一書房豪華版『萩原朔太郎詩集』 昭和3年(1928) 所収

郷土・郷土史関連図書情報

地元に関連する新刊図書を紹介します。興味のある方は、書店等で購入するか、近くの図書館で閲覧して下さい。

1. 小説　品川心中

有名な落語の小説化です。客はつかの間の夢に金を払う。女郎の本音なんて知りたくもなかろう！元最上位の遊女・お染。寄る年波には勝てず、馴染みの客たちも離れてしまい、いまや衣を新調するための金にも困るようなありさま。元来の勝気な性格もあって、ひと思いに死んでしまおうかと思うが…後は御承知の通り。

著　者：坂井　希久子
監　修：柳家　喬太郎
挿　絵：松浦　シオリ
出版社：二見書房
定　価：本体 1540 円(税込)
初　版：2021 年 02 月 26 日
ISBN：9784576210315

2. 東京落語散歩

江戸でも東京でも変わらない寄席。古典落語の舞台を歩く 20 コース。前書に関連し、ちょっと古いですが落語と品川について書かれた本です。演目のあらすじとイラストマップがついています。品川・鈴ヶ森の章には品川心中だけでなく他の演目も多数紹介されています。

著　者：吉田　章一
出版社：角川書店
定　価：本体 555 円(税込)
初　版：2009 年 03 月 25 日
ISBN：9784043936021

注：本稿は月刊「 品川郷土の会会報 復刊 114 号」の一部を要約したものです。